

博士論文審査の要旨

張楽楽君の博士論文（戦後の日中関係の展開と両国における「高度経済成長」に関する研究—覇権システムとその秩序の下で織り成される経済発展と民主主義の発展の関係史からの考察）の概評は以下のとおりである。

張楽楽君の博士論文の特徴と、その研究上の意義は、覇権システムとその秩序を前提として織り成されてきた経済発展と民主主義の発展の関係史に関する村田モデルを、戦後の日本と中国の歴史に実際に適用、応用させながら、実証分析したところに見出されるといっても過言ではない。本論文はその一点だけをもっても高く評価されるのだが、同論文は、さらに以下のような仮説を導きだしている。

すなわち、村田モデル（一九七〇年代頃まで）に依拠しながら、①戦後の「パクス・アメリカーナ」と日米関係の下での、B グループに位置する日本の戦後高度経済成長の実現により、村田モデルで描くセカイ・世界の「円滑な」発展が促されるに至ったこと、②同じく B グループの先頭に位置していたソ連による、A グループの先頭に位置していた覇権国であった米国と米国主導の世界秩序の普遍化に対する妨害あるいは牽制しようとする動きを「封じ込め」るのに寄与したということ、③そうした日本の果たした封じ込めの作用が、村田モデルの C グループに位置していた中国による、B グループのソ連との合従連衡の動きを封じ込めるに与ったこと、④そしてそれらの流れが、村田モデルで描くセカイ・世界の形成と発展に戦後三〇年にわたり影響したことを論究している。

これらに加えて、同論文の重要な論点は、上述した戦後日本の高度経済成長が、一九七〇年代末以降の中国の「改革・開放」政策とその実現に伴う、中国における高度経済成長に導いたことを、村田モデル（一九七〇年代以降から現在まで）に依拠しながら、主張している。この点を指摘する前に、こうしたセカイ・世界の変容に導くのに与った重要な歴史的歩みを考察している張楽楽君の見解を紹介しておこう。まず、村田の歴代覇権国の興隆と衰退に関する「三位一体」モデルをもとにししながら、それを独自の視点から中国に適用させて分析、考察したことである。村田の興隆と衰退のモデルを、興隆と成熟に置き換えることで、衰退期をなお迎えていない中国経済の「興隆期」をさらに、その発展期と、発展期以降の衰退期を迎える前の段階を、成熟期として位置付けることにより、村田の従前のモデルで描かれていた興隆と衰退モデルの関係を、さらに精緻化させることに寄与した点で、意義深い分析、考察となったことである。次に特質される点は、日本の高度経済成長と、一九五〇年代から七〇年始めに至る中国との経済関係に関して触れながら、中国の経済発展が日本の高度経済成長の下での経済発展を支え、それが同時に日本の民主主義の発展の高度化の歩みを支えていたという論点の提示である。そこからさらに、そうした当時の日中間の経済発展と民主主義の発展が、中国の政治体制を、権威主義的性格の政治へと促し、中国の国家建設を強固なものとなせながら、同時に、米国主導の覇権システムとその秩序を支えることに貢献していたという関係を明らかにしたことである。まさにこうした関係の形成と発展は、ソ連の崩壊と対比する際に、中国を崩壊させなかった要因として働いたということを考え、理解させる上で、同論文は示唆を与えてくれるのである。

これらを概略すれば以下のとおりになる。すなわち、①パクス・アメリカーナと日米安保体制の下での日本の高度経済成長の実現は、村田モデル（一九七〇年まで）で描くセカイ・世界の形成と発展を促し、戦後の三十数年間のつかの間の〈平和と安定〉をもたらしたこと、②いわゆる「冷戦」は、村田モデルの A グループの米国とその同盟国、協力国と B グループのソ連とその衛星国との対立、衝突であることを論証しながら、日本の高度経済成長がそうした対立、衝突を緩和させると同時に、A グループの米国の力を補強、補完する役割を担ったこと、③そうした中で、米国と中国のいわゆる、ニクソン訪中の動きが準備されたこと、一九七九年の米中国交正常化と改革開放に至る流れが導かれたこと、④こうした一連の流れが、村田モデルで描く一九七〇年代までのセカイ・世界（{[A]→(×)[B]→×[C]}）から、一九七〇年代以降から今日に続く

セカイ・世界（{[B]→(×)[C]→×[A]}〈いずれのモデルも省略型、共時態モデルである。〉）にと変容、転換させるのに大いに与ったこと、を論じている。

そして、⑤村田モデルのセカイ・世界に示される、こうした変容、転換の中で、実質的には、冷戦構造〈関係〉は終焉を迎えていたこと、⑥その意味では、レーガン政権下での「スター・ウォーズ」計画とそれに伴うソ連に対する力による対決姿勢が冷戦を終わらせたとする従来の見方は、一面的評価であること、⑥むしろレーガン政権下における対中経済・貿易関係の強化と、それに後押しされた中国経済の高度経済成長に向かう地盤強化の動きこそが、冷戦終結へと導く主たる要因を形成していたことを直接、間接的に論証している。

張楽楽君の博士論文の特徴と研究上の意義は、このような論点にまとめられる。ここで今一度整理しておく。パクス・アメリカーナとその下での戦後の日米安保体制は、日本の高度経済成長と戦後民主主義を実現させる上での大きな前提であったが、そうした仕組み、あるいは制約が、村田モデルで描く一九七〇年代までのセカイ・世界の「順調な歩み」を導いた。しかしながら、そうした「仕組み」、「制約」の下での日本の高度経済成長は、やがては改革開放以降の中国の高度経済成長を「結果的に」は促しながら、新たな米中関係の構築（「米中覇権連合」の形成）が促進されている。ここに、米国政治の基軸は、日本から中国へと明らかに移動していることがうかがえる。このようなことを、同博士論文は読者に連想させるものと言えるのだが、同論文の意義は、決して「結果として」、歴史を後付けするそうした方法論をとってはいないところに見出される。あくまでも最初にモデルを前提として、そこから演繹的に仮説を立て、その上で日本と中国の高度経済成長の歴史を帰納的に再構成することを試みているところにある、と評者はみている。

以上、張楽楽君の博士論文の最終審査に関する概評を述べてきたが、当然ながらまだ改善すべき点も残されている。たとえば、各章、各節で取り上げられている項目の取り扱い方（論究された内容）が、村田モデルから演繹、予想される事態と関連付けられながら、掘り下げられた（であろう）実証分析にまで、なお至っていないところが散見される点である。とくに、村田モデルが描き出した一九七〇年代までのセカイ・世界と、一九七〇年代以降から今日に続くセカイ・世界の変容、転換の歩みとその意味と意義を、十分に咀嚼し掘り切れていないことである。こうした点が、もう少しだけでも、論の展開に組み込まれるならば、博士論文の内容は格段に精緻化されると同時に、戦後の日中関係と両国の戦後の高度経済成長の歩みが、パクス・アメリカーナからパクス・チャイナへと覇権のバトンの引き継ぎ（引き渡し）が行われている今日の国際関係を、より明らかに垣間見せられたに違いない、と評者はみている。

しかしながら、そうした改善点や修正の余地は認められるものの、これらはあくまでも張楽楽君がこれから一〇年、二〇年かけて研究を続けていくうちに解消されるものであると、評者は確信しているし、上述した注文は同博士論文の価値を貶めるものでは決してないことも併せて強調しておきたい。ここまで論を展開できたからこそ、そうしたさらなる研究課題を掘り当てることができたのである。こうした点を踏まえた上で、評者をはじめ、審査会一同は、張楽楽君の博士論文を合格と判断したことを、報告する。